

パルヴスと第一次世界大戦-1914-1916年のツァーリ 帝国転覆計画-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学大学院 公開日: 2010-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西川, 伸一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/7774

パルヴスと第一次世界大戦

——1914-1916年のツァーリ帝国転覆計画——

PARVUS UND DER ERSTE WELTKRIEG—BETRACHTUNGEN ÜBER SEINEN PLAN DER REVOLUTIONIERUNG RUBLANDS :

1914-1916—

博士後期課程 政治学専攻 1986年入学

西 川 伸 一

NISHIKAWA SHIN'ICHI

はじめに

1914年6月28日のサライエヴォ事件を発火点とする第一次世界大戦の勃発は、ヨーロッパの社会主義者にとって重大な試金石となった。それまで第二インターナショナルの大会等で、反戦の立場を幾度となく確認してきた彼らは、実際に開戦に至るやその多くが戦争支持、祖国擁護へと立場を豹変させたのである。周知のように、その最たる例は、ヨーロッパ社会主義の本流をもって任じたドイツ社会民主党（以下 SPD）議員団が8月4日に行った戦時公債への賛成投票であった。もちろん SPD が全党的に「城内平和」を受け入れたわけではなく、ローザ・ルクセンブルクら左派の闘士たちは、依然として従来の立場を貫いていた。しかし興味深いのは、この党内急進派の中からも、「社会排外主義者」¹⁾に転じてゆく人々が現れたことである。レンシュ (Paul Lensch)、パンネクーク (Anton Pannekoek) はその典型と言ってもよい。本稿がテーマとするパルヴス (Parvus・本名ヘルファント Alexander Israel Helphand : 1867-1924) は彼らの中でも、レーニンに「最後の一線におっこちている」と酷評されるほどに徹底的に祖国擁護に回った人物である²⁾。

ロシア生まれのユダヤ人として SPD 黨員になったパルヴスは、90年代には党内左派の“暴れん坊”として修正主義と対決し、また第一次ロシア革命に際しては、長駆帰国してトロツキーとともにペテルブルク・ソヴエトを指導した経験を持つ。そして革命敗北後は、ドイツに戻り、その教訓を踏まえて革命戦略に関する力作を立て続けに発表している。「彼は第一次世界大戦前のドイツにおいて、及びロシア人革命家と亡命者の世界において、一流のマルクス主義的著述家、理論家として確たる名をなしていた」³⁾と指摘される所以である。しかし彼は、1910年、党の公金着服が原因でドイツを離れることを余儀なくされ、コンスタンチノーブルに向かう。彼は「ヨーロッパの火薬庫」

で大戦勃発の報を聞くことになったのである。

これよりパルヴスは、左派の論客という肩書をかなぐり捨て、ドイツ政府の戦争政策に積極的に加担してゆく。金銭トラブルに加えこの「転向」で、党内外におけるパルヴスの声望は失墜し、トロツキーからは1915年2月、「生ける友の弔文」をつきつけられてしまう⁴⁾。かかる経緯もあって、彼は現在まで「アフター・マルクス」の片隅にその名を止めるに過ぎない。なるほどポリシェヴィキ革命の立役者はレーニン、トロツキーのみならず、パルヴスを加えた三人だとする論者もいるが⁵⁾、それはあくまで陰の立役者という意味なのだ。

革命家としての矜持を賭してまで、パルヴスが実現しようとしたものは何だったのか。それを目指して彼はいかなる行動を取ったのか。本稿の目的はここにある。その対象とする期間は、開戦直後から、「血の日曜日」を想起させる「1916年1月9日」までである。

1. 戦争に対する態度

第一次バルカン戦争のさなかに開かれた第二インターナショナル・バーゼル臨時大会（1912年11月24-25日）において、ヨーロッパの社会主義者たちは大戦前夜という雰囲気の中、1907年のシュトゥットガルト大会でなされた反戦決議を確認しあった。その決議とは、各国の社会主義者の義務として、戦争勃発の防止に全力を尽くすこと、それでもなお戦争が勃発した場合には、資本主義的階級支配の排除を促進するよう極力努めることを謳ったものであった。バーゼル大会出席者は、迫り来る帝国主義的世界戦争に「戦争に対する戦争」を対置すべしとした決議案を満場一致で採択したのである⁶⁾。

しかし第二インターのこのような宣言は、彼ら社会主義者が拠って立つマルクス＝エンゲルスが示した戦争に対する態度からの逸脱を意味していた。マルクス＝エンゲルスによれば、社会主義者は戦争に際しては、交戦国のいずれかを社会主義の大業に照らして支持すべきであり、しかもツァーリズムはヨーロッパ社会主義の最大の敵と目されていたのだ⁷⁾。従って、SPDがツァーリズムに対する戦争支持に転じた「8月4日」は、旧来のマルクス＝エンゲルスの立場に回帰したともみなしうるのである。そして、この回帰を最も痛烈に批判したのがレーニンであったことは、言うまでもない。

当時パルヴスはトルコにあって、第二インターの一連の平和キャンペーンを冷やかな目で眺めていた。1907年に出された『植民政策と崩壊』で分析されているように、彼は世界市場と植民政策の研究から資本主義においては戦争は不可避だと結論づけていたからである。そして、開戦直後の1914年10月に書かれた「民主主義のためにツァーリズムに反対して」の冒頭では、この戦争の性格を次のように規定している。「資本主義が育んだ帝国主義がこの戦争を惹き起こした。…各国の資本主義的産業の発展が全世界に軋轢と争いを生み出した。というのも、各国の資本主義的産業には、世界市場全体を獲得しようという傾向があるからだ。」⁸⁾ こうして始まった帝国主義戦争は、営々と築き上げられたヨーロッパ産業を破壊し、文明や国家権力が必死で守ろうとしてきた私有財産制を

も破壊している。彼はここに、今次大戦の歴史的意義を見いだすのである。

とすれば社会主義者はいかなる行動を取るべきなのか。彼にとってその原則は明らかであった。すなわち社会主義者は、「戦争の帰結がプロレタリアートに有利になるように」努めるべきであり⁹⁾、「戦争とそれによって創出される政治状況は、プロレタリアートの政治的立場を強めるために利用されねばならない」のである¹⁰⁾。社会主義を目指して戦争を最大限利用せよ、そのためにはどちらの陣営につくべきなのか。この回答は彼のツァーリズム観から提出された。

若くして祖国ロシアを出奔したパルヴス（1887年出国）にしてみれば、ツァーリズムは不倶戴天の敵であった。ユダヤ人という彼の出自を考えればなおさらである。彼は言う、「ツァーリズムの勝利は恐るべき民主主義に対する打撃を意味することになろうし、同時に無制限の資本主義的搾取の新時代を切り開くことになろう。」「これは民主主義と社会主義を脅かす危険である。」それゆえ全ヨーロッパの社会主義者に当てはまるスローガンは「ツァーリズムに対する闘争を！」なのだ、と¹¹⁾（ゴシック体は原文どおり）。そこからロシアと結ぶ協商国は反動の代表であり、これと戦うドイツは、政府の意図はともかく、革命的役割を果たしているという論理が導き出される。しかもこの革命的ドイツ軍の主力は、武装したドイツのプロレタリアートなのであった。

「ドイツの労働者は言い知れぬ犠牲の下に、ロシア人民の自由のために道を開いてきた。」「彼らは、自分たちがその勝利によってロシアの諸人民にも自由を勝ち取ってやれることを十分に意識しており、そのことが彼らの熱意と献身的勇気を倍加させたのだ。」「¹²⁾

すなわちドイツ軍は、ツァーリの圧政に苦しむロシア人民にとっての解放軍というわけである。しかもロシアには、ツァーリズムを打倒できるほどの社会民主主義勢力が育っていない。というのも、「高慢ちきにも自らをマルクス主義者だと称するロシアの文筆家たちは、…現実の中でマルクス主義を用いる術を知らず、彼らはただ社会民主主義風にものを書くことを学んだにすぎない。すなわち彼らは要するに、単に自らの頭の中にマルクス主義の引用文を一杯に詰め込んだにすぎないのだ。」「¹³⁾ それだけにドイツの勝利を望むことは当然のことであった。パルヴスはのちにこう述懐している。

「ロシアの敗北に賛成したものは、ドイツの勝利を見込まなければならなかった。これを認めないのは現実の前で目をつぶることなのだ。しかし、ドイツの勝利はプロイセン軍国主義の勝利ではないかと異議を唱えるものもいる。それならここではいかなる決定がなされるべきだったのか。全くわからない。社会民主主義の従来規則に従って、より小さな悪が選択されなければならなかったのだ。そしてドイツの事情の方がツァーリ・ロシアより好ましいことに何の疑いもなかった。私はドイツ社会民主主義の歴史的使命を確信し、世界大戦はそれ自体、特に強力な革命的要因になるだろうということを知っていただけに、私にはその決定は容易であった。」「¹⁴⁾（傍点部は原文では斜字体）

とはいえ、プロイセン軍国主義の勝利となるドイツの戦勝は、どうして正当化されえるのか。彼の生涯の親友ヘーニッシュ（Konrad Haenisch）によれば、パルヴスはそれを以下のように考えて

いたという。すなわち彼の見通しでは、ドイツの勝利がもたらす、ツァーリズムからのロシアおよびヨーロッパの解放は、また同時にプロイセン軍国主義とホーエンツォルレン家の半絶対主義の圧力からのドイツと西欧の解放にも連動するはずであった。というのも中欧の半絶対主義は、ツァーリズムの庇護下であり、この庇護がなくなれば半絶対主義も破滅するからである。かくてツァーリズムの敗北によって、ヨーロッパに民主主義が凱旋することになる、と¹⁵⁾。

しかし、パルヴスがいかに力説しようとも、このような見解はドイツ軍国主義の危険をあまりに過小評価してはいまいか。また、ドイツ軍をツァーリズムに対する解放軍だとして称揚するのは、例えば日本帝国主義が15年戦争中に、アジアの諸地域を侵略した際の口実を思い起こさせる。彼自身にはその意図はなかろうとも、結果的には彼の所論は、「世界強国」を目指していた当時のドイツの戦争政策を擁護することになったと言える。あるいはパルヴスはそれらを承知の上で、どんなに危険を冒しても彼が「人類史の最大の汚点」と呼ぶツァーリズムの打倒となら引き合うと考えていたのであろう。

いずれにせよ上記の推論からパルヴスは、「私にはどうして、どの国のどの社会主義者もこの闘争に中立のままでいることができるのかわからない」と語る。重要なのは、社会主義者が資本主義国家の中で苦勞して勝ち取った立場すなわち民主主義を守り抜くことなのだ。つまり「民主主義はツァーリズムに脅かされている。それゆえにツァーリズムに対する闘争を！」¹⁶⁾ということが宣揚されなければならない。その脅威をとりわけドイツに限ってみれば、これは同時に SPD に対する攻撃でもあった。従って「戦時公債への賛成投票は当然のことだった。」「ドイツ社会民主主義は社会主義の牙城であったし、依然としてそうである。この牙城が落ちれば、それとともに社会主義全体が瓦解してしまうだろう。」¹⁷⁾

このようにパルヴスは、当面する戦争を帝国主義戦争と規定した上で、ドイツ軍の戦いは反動の、砦たるロシア帝国の解体をもたらすがゆえに、無条件に支持すべきであると主張した。換言すれば、ドイツ帝国主義の勝利の方が「より小さな悪」というわけである。なるほどツァーリズムに対する戦争支持という点では、マルクス＝エンゲルスと同じ立場にある。しかし、パルヴスのみならずマルクス＝エンゲルスに則した形で戦争支持に転じた社会主義者は¹⁸⁾、レーニンによって「マルクスとエンゲルスのごまかし引用」だとして批判される。それではレーニンの戦争に対する態度はいかなるものであったのか。

レーニンによれば、これを決するには戦争の性格を見極めなければならない。クラウゼヴィッツが指摘したように、「戦争は別の(すなわち暴力的な)手段による政治の継続」だからだ。例えば、19世紀のブルジョア進歩派の民族解放戦争をマルクス＝エンゲルスが支持したのは、この戦争が封建制と絶対主義の「政治の継続」であったためだ。この場合にはどのブルジョアジーの勝利が望ましいかということが問題となった¹⁹⁾。ところが今日の戦争は異なる様相を呈している。「この戦争は帝国主義戦争、すなわち、もっとも発達した資本主義の時代、資本主義の終りの時代の戦争である。」²⁰⁾ ゆえに「ブルジョアジーは、興隆しつつある先進的階級から、転落しつつある、衰退的な、内面的

には死んだ、反動的な階級になった。』²¹⁾ (傍点部は邦訳全集どおり。以下同じ)

従って、もはや現在の戦争では、どちらの陣営の、すなわちどちらの帝国主義ブルジョアジーの勝利が望ましいかという問題の立て方は、通用しない。しかるにロシアやドイツの「社会排外主義者」たちは、「ブルジョアジーが進歩的だった時代の戦争にたいするマルクスの態度を今日引合いにだし」て、自らの方向転換を正当化している。「このブルジョア進歩派の民族解放戦争にたいする評価を現在の帝国主義戦争におよぼすのは、真実を嘲弄するものである。』²²⁾

要するにレーニンは、マルクス＝エンゲルスが示した戦争に対する態度は、当時の戦争を絶対主義の「政治の継続」と認識したところから演繹されたものと断じ、今日、戦争支持、祖国擁護に与している社会主義者は、それを故意に見落としていると非難したのである。一方でレーニンは、当面する戦争を帝国主義の「政治の継続」とみなし、これに対する闘争を主張する。そこから導き出される戦争に対する態度は、「帝国主義戦争を内乱に転化せよ」というスローガンであった。そして、そのためになすべきことは、「どちらの帝国主義ブルジョアジーにも加担しないで、「両方とも悪い」と言い、またそれぞれの国で帝国主義ブルジョアジーの敗北をのぞむ」ことだとされた²³⁾。彼は、すべての帝国主義国で、プロレタリアートが自国政府の敗北を望むことを、「公理」とまで呼んでいる²⁴⁾。

とりわけロシアには、「この命題はとくに正しい」という。なぜなら、「ロシアが勝利すれば、それに伴って、世界の反動はつよまり、国内の反動はつよまり、すでに奪取されている地方の諸民族は完全に隷属するであろう。だから、ロシアの敗北は、どんな条件のもとでも、害のもっともすくないものである。』²⁵⁾ ツァーリズムが敗北することは、「最小の悪」だというわけである。だが論理としては、自国の敗北は他国の勝利に、ロシアの敗北を望むことは、ドイツの勝利を望むことにならないのか。「公理」は矛盾しないのか。

この点、日露戦争中に書かれた「旅順の陥落」では、立場がはっきりしていた。レーニンは日本の勝利を望んだのである²⁶⁾。だが今回は歯切れの悪さを感じさせる。そこをトロツキーに衝かれてレーニンは、この論理の必然を「政府およびブルジョアジーの戦争の見地」だと切り返した²⁷⁾。ちなみにドイツの社会主義者は「ツァーリズムにたいする解放戦争」を声高に叫んでいるが、ロシアのみならず「おなじように君主主義的なドイツの帝国主義もまた封建的＝王朝的な目的」をもっているのである²⁸⁾。つまり「二つの交戦国グループのどちらかが敗北したほうが、社会主義にとって害がすくないかを、国際プロレタリアートの見地から決定することは、現情勢のもとでは不可能」なのだ²⁹⁾。となれば各国のプロレタリアートは戦争を内乱に転化すべく、自国政府の敗北を目指して活動するほかない。

しかし、レーニンのこの敗北主義は、努力目標であって、達成目標ではなかったと言うべきであろう。論理からいっても達成できるはずがないのだ。力点は内乱におかれていた。すなわち「公理」の矛盾を止揚したものは、ヨーロッパ革命の展望だったのである。

「帝国主義戦争は、ロシアにおける革命的危機、ブルジョア民主主義革命を基盤とする危機と、

西欧におけるプロレタリア社会主義革命の危機の増大とを結びつけた。…ロシアにおけるブルジョア民主主義革命は、いまではもう、西欧の社会主義革命の序曲であるだけでなく、切りはなすことのできない構成部分なのである。』³⁰⁾

以上の検討から次のことが指摘できよう。大戦に際会して、パルヴスとレーニンは、この帝国主義戦争を社会主義のために最大限に利用しようとする点では一致していたが、そこから引き出された結論は対照的なものだった。前者はツァーリズムの打倒にすべてを従属させ自国政府の戦争政策を熱烈に支持した。一方、後者は戦争に内乱をもって応え、自国政府の敗北を望んだ。しかしロシアの敗北を願う点に限れば両者の見解は一致していたのである。レーニンは、ツァーリズム打倒の付随する条件としてのドイツの勝利については、言及を避けていたが³¹⁾。そしてこの点に着目したパルヴスは、次章のとおり、レーニンに接近を図ることになる。

さらに、ここで注意したいのは、戦争に対するパルヴスとレーニンのスタンスの相違である。既述のように、パルヴスはことあるごとに、ドイツのプロレタリアートが支配階級から長年の闘争を経て獲得した民主的諸利益を、守ろう訴えている。戦争に負けては元も子もない。ここから祖国擁護が正当化されたのである。ドイツには、「労働運動の日常的進歩がもたらしたところの階級的利益」³²⁾を保守する根拠が存在していた。ところがロシアには、他国と比較して、この「日常的進歩性」が全くない。レーニンの「革命的敗戦主義」は、ロシアのように「国の現状が耐え難く、現存の政治体制が存続するよりは国が敗けた方がましだと思わせるような国ではあてはまった」³³⁾のである。だからといって、敵国政府の勝利を支持するわけにはいかない。それはその国の帝国主義的ブルジョアジーの勝利、彼らと闘うプロレタリアートの敗北を意味する。階級的視座に忠実だったことに、レーニンのジレンマがあった。これに対して、ロシアに生まれながらドイツに対する帰属意識を強く表明するパルヴスには³⁴⁾、カーの言葉を借りれば³⁵⁾、階級的忠誠に拮抗しうるほど強力に国民的忠誠が作用していたということであろう。

2. ツァーリ帝国転覆計画

(1) ドイツの戦争政策とパルヴスの基本戦略

「世界強国」を目指して第一次世界大戦に突入したドイツは、二正面戦争を余儀なくされた。腹背に敵をもつという不利な状況から逃れるために、ドイツ帝国政府指導部は様々な布石を打った。敵陣営内の不満分子の活動を支援したのもその一つである。これを指導したのは参謀本部残留代理部政治課および外務省であった³⁶⁾。特に対露謀略に限ってみれば、在外の急進的社会主義者の動員が計画の要をなしていた。1914年9月のマルヌの戦いに敗れ、シュリーフェン・プランが破綻したことにより、戦況はドイツに不利に展開していた。それだけにロシアとの単独講和が望まれ、ツァーリ政府を交渉の席に着かせるためにも、ロシアを不穏な情勢に陥れなければならなかったのである。パルヴスは、エストニア人ケスキュラ(Alexander Eduard Kesküla)とともに、この工作の中心的人物になってゆく³⁷⁾。

開戦後トルコでドイツ支持を訴えていたパルヴスは、1915年1月7日、コンスタンチノーブル駐在ドイツ大使ヴァンゲンハイム(Hans Freiherr von Wangenheim)と会見する機会を得る。ここで彼は「ロシアの民主派のみが、ツァーリズムの全面的解体とロシアの小国への分割という彼らの目的を達成できる…ドイツ政府の利害はロシアの革命家のそれと一致している」と述べ、両者の協力を唱えた。翌8日、ヴァンゲンハイムはベルリンに打電し、パルヴスを対露工作の中心人物として推薦している。外相ヤーゴ(Gottlieb von Jagow)からの返電は、「喜んでヘルファント博士をベルリンにお迎えする」というものだった³⁸⁾。かくて2月末、彼はベルリンに招かれ、外務省で宰相ベートマン＝ホルヴェーク(Theobald von Bethmann-Hollweg)の腹心リーツラー(Kurt Riezler)に面会した。そのとき彼は、「ロシアにおける政治的大衆ストライキの準備」³⁹⁾(以下、「3月メモ」)なるメモを持参し、彼のツァーリ帝国転覆計画を開陳したのである。

そのメモにおいてパルヴスはまず、春のうちにロシアで「自由と平和」のスローガンの下に、政治的大衆ストライキを準備すべきであると直近の目標を掲げている。彼は命ずる、ペトログラード、とりわけオブーホフ、プチャーロフ、バルトの各工場をストの拠点とせよ。そして、第一次ロシア革命のように、産業の動脈である鉄道寸断によって、ストライキの波及を図るべし、と。だがこれを指導しうるのは、ロシア社会民主労働党以外にない。かくてロシア社会主義の指導者たちの会議が必要となる。その会議に参加すべき党として、彼は10の党派(ボリシェヴィキ、メンシェヴィキ、ブントのほかロシア帝国内の少数民族の社会民主党)を挙げているが、そのうちボリシェヴィキ・メンシェヴィキ間の討議を優先すべきだとした。両派の統一がこの計画の成否を握ると考えていたのである⁴⁰⁾。

つづいてパルヴスは地方の運動に言及し、黒海沿岸、バクー油田、ドネツ炭田、ウラル地方、シベリア、ウクライナ、フィンランド、カフカースといった地方ごとに具体的な扇動準備を指示している。そこでも第一次ロシア革命時に出した要求を保ちつづけることが、扇動の基本とされた。とりわけ黒海沿岸の軍港ニコラエフを「特に注目すべきだ」とした。ここには2隻の軍艦建造のために、多数の労働者が働いていたのである。そのほかに彼は、民族的マイノリティーの分離独立運動を重んじていた⁴¹⁾。中でも少年期を過ごしたウクライナに関しては、農民運動にも関連させてこう述べている。

「ウクライナでは、〔農民の生活条件改良のための—引用者〕すべての要素が結合して自治権要求を生み出している。…独立ウクライナの成立は、ツァーリ体制からの解放および農民の不穏状態という混沌からの救済として展望されよう。…大ロシアの農民は、ウクライナの農民がその近くで決起すれば、きっと安閑としたままではないことであろう。」⁴²⁾ 不在地主に苦しむウクライナ農民の蜂起は、全ロシア規模での農民騒乱へ連動するというのである。

加えて「3月メモ」では、反ツァーリズムの国際世論を盛り上げるための、プレスキャンペーンが提起される。当時まだ参戦していなかったイタリア、ブルガリア、ルーマニア、合州国の態度決定に影響を及ぼすためである。特にロシアと国境を接するルーマニアは、南部ロシアの革命的扇動

の中心（パルヴスは黒海沿岸の扇動について、ルーマニアのコンスタンツァあるいはガラチに組織の中心をおくべきだと述べている）ゆえに、そこでは大きな意味をもっていた⁴³⁾。

パルヴスの見るところ、ロシアの現状は開戦直後の熱気も冷め、国内には不満が鬱積していた。それゆえ、上で示したストライキ、蜂起、政治的扇動によって大衆の不満は増幅され、ツァーリ政府を窮地に追い込むことができる。それは第一次ロシア革命で実証済みだ。彼は、次のように自信の程を語る。「とにかく、あらゆる利用可能な諸力が上述の計画に従って動員されれば、春には政治的大衆ストライキが起これと予想できる。」⁴⁴⁾ そして「3月メモ」の結びの文において、彼はその構想の特徴を簡潔にまとめている。

「かくて、中欧列強の軍隊と革命運動は、ツァーリ帝国を体現している巨大な政治的中央集権制、しかもそれが存続する限り世界平和にとっての危険となる中央集権制を粉碎し、ヨーロッパの政治的反動の牙城を倒すことだろう。」⁴⁵⁾

だが実際は、1915年春に「政治的大衆ストライキ」（SPD は「ゼネスト」のことを「大衆ストライキ」と呼んでいた）は起こらなかった。ロシアの労働運動は、開戦後徹底的に弾圧され、労働者は15年夏までストに立ち上がることはなかったのである。パルヴスの読み違いは、第一次ロシア革命と同じテンポで、当面する革命情勢が昂進すると予想したことから生じていた⁴⁶⁾。しかし彼はこのメモ提出により、ドイツ政府の信任を得、以来ロシア情勢に関する助言者となる。

ベルリン訪問後のパルヴスの行動についての検討は、次節に譲るとして、ここでは「3月メモ」に見られるパルヴスの基本戦略を整理しておきたい。パルヴス研究者シャルラウ（Winfried B. Scharlau）によれば、それは国際的プレスキャンペーンに支えられた民族革命と社会革命の結合であった。すなわちパルヴスは、ロシアには大別して二つの反体制グループがあるとみなしていた。民族的マイノリティーとプロレタリアートだ。彼は、両者の遠心力で、ツァーリ帝国を瓦解させようともくろんだのである。そして、ツァーリズム打倒こそ社会主義の大義だと喧伝する国際的プレスキャンペーンが、ロシアの情勢に拍車をかけるとされた⁴⁷⁾。このように彼の基本戦略は三つの戦術から成り立っていたのだ。それはロシア2月革命まで不変であった。以下では、かかる整理に従って、本稿が対象とする期間のパルヴスの活動を再構成してみたい。

(2) 三つの革命促進戦術

i) ロシア帝国内の民族独立運動に対する支援

先に述べたように、ドイツ帝国政府指導部は戦争遂行の負担を軽減するために、敵陣営の背後に回って謀略工作を企てた。ロシアに対しては、「ロシアによって抑圧されている諸民族の解放と安全保障、ロシア専制政治をモスクワへ後退させること」という宰相ベートマン＝ホルヴェークの訓令が出されていた。とりわけウクライナの分離独立は、早くも開戦第二週にはドイツの戦争政策の公式目的として表明された⁴⁸⁾。かかるドイツの策動とパルヴスの暗躍が最初に交錯するのは、まさ

にこのウクライナをめぐるものである。

1914年8月、リヴォフ（レンベルク・当時オーストリア＝ハンガリー領、現在ソ連ウクライナ共和国領）に亡命ウクライナ人社会民主主義者によって、「ウクライナ解放同盟」が設立された。その目標はウクライナの独立であった。9月3日のロシア軍によるリヴォフ占領後は、拠点をウィーンに移すことになる。そして9月末には、ウクライナへの遠征軍の派遣による、前線の背後での蜂起の扇動という具体的方策も立てられた。その下検分のため、指導者の一人メレネフスキー（Marian Basok-Melenevski）は、ウィーンを発ってコンスタンチノーブルに向かう。それはトルコが独逸側に参戦する直前（トルコ参戦は11月5日）のことであった。この地で彼は、20世紀初頭より『イスクラ』紙上でその名を知っていたパルヴスの下へ直行したのである^{49）}。パルヴスはメレネフスキー来訪の模様をこう記している。

「久しくウクライナ社会民主主義者として知っているマリアン＝メレネフスキーがコンスタンチノーブルにやって来たとき、私は喜んで彼を、ウクライナとその民族的努力について世論を啓発するために、コンスタンチノーブルの新聞に推薦した。私はまた、ウクライナ社会民主主義が私の小論「民主主義のためにツァーリズムに反対して」を現地語に翻訳することに、何の異存もなかった。そして私はウクライナ語版のための特別の序文を付けることにした。」^{50）}

その結果、『タスヴィリ・エフカル』（*Tasviri efkâr*）紙に「ウクライナ解放同盟」の最初の声明が掲載された。また12月には、パルヴスの戦争に対する態度を明らかにした「民主主義のためにツァーリズムに反対して」（脱稿されたのは10月）のウクライナ語訳が「同盟」出版部より刊行される。これには同出版部の序文とパルヴスのウクライナ語版への序文が付されていた^{51）}。パルヴスの序文を見ると、この頃よりロシアの民族的マイノリティーの分離独立が、彼の革命戦略に加わったことがわかる。その要旨を示せば以下のようなになる。

ウクライナの独立闘争は、ツァーリズムに抑圧されている全人民の解放闘争の一翼を担っている。なぜなら中央集権制こそツァーリ帝国の力の源泉であるからだ。ところが、ロシアのブルジョアジーは帝国の維持・拡大と自らの政治的地位の向上のみを願って国策支持に回っている。それゆえツァーリズム打倒のためには、大戦での壊滅的敗北と中央集権制の解体を望むしかない。しかも隣国ドイツのプロレタリアートはツァーリズムに対する断固たる闘争に立ち向かっているのだ。ドイツの社会民主主義者は、ツァーリズムに対するロシアの革命家の闘争を自ら闘争の一部だとみなしている^{52）}。

だがプレハーノフらのロシアのマルクス主義者は、祖国擁護に徹している。それは「ロシアの国家権力の理念と結びついたナショナリズムである。」それゆえロシアのマルクス主義者には、「ロシア帝国を形成している個々の民族の自治制がもつ社会革命的意義を理解することはもはやできない。…実際にはこのような方法によってのみ、社会主義的変革の理念と不可分の、かの政治的世界連合の基礎が創出されるのだ。」その論拠としてパルヴスは、マルクスの『フランスにおける内乱』の一文を引いている（「労働者階級は、できあいの国家機構をそのまま掌握して、自分自身の目

的のたけに行使することはできない』)。そして結論する、「個々の民族の独立とその国際的連合—これこそ社会主義の将来の国家構想なのだ」と⁵³⁾。

遠征軍を派遣するという「ウクライナ解放同盟」の考えは、パルヴスの望むところであった。そこでメレネフスキーは、独逸に支援された革命運動のコンスタンチノーブルでの総指揮者であったツィンマー博士(Dr. Max Zimmer)をパルヴスに紹介した。こうしてパルヴスはツィンマーとともに遠征軍のまとめ役になったのである。トルコの参戦後、メレネフスキーは黒海沿岸のトルコ軍を後ろ盾にウクライナ領に潜入する構想を練り、500人のウクライナ人の遠征隊派遣を計画した。だがこれらの計画も、トルコの実権を握るエンヴェル・パシャ(Enver Pasha)が戦略上の理由で反対したことから、頓挫してしまう。結局、「同盟」の企ては、亡命活動家の間でのプレスキャンペーンと政治的扇動以上には進展しなかった⁵⁴⁾。

その首尾はともかく、ここでパルヴスが民族運動の革命的エネルギーに気付き、それを彼のツァーリ帝国転覆計画の一翼に位置付けた点は重要である。これは、前に述べた「3月メモ」における詳細な地方運動の記述に連なっていく。目指すは、ロシア帝国の分邦化であった。彼は、1915年10月に著した「新たなロシア」という小論でも、同じように、将来ロシアが最大の産業国になるためには、「アメリカの例にあるように、ロシアを独立した諸国に改組する」ことが必要だと述べている⁵⁵⁾。ツァーリ帝国の支配は、非ロシア諸民族を抑圧しているばかりでなく、ロシア自体の発展をも阻害しているというのである。その支配の打破こそ、パルヴスの念願であった。

ii) 革命運動に対する支援

ウクライナ独立工作が失敗したのち、パルヴスはツィンマー博士を介して当地のドイツ大使館に接近し、大使ヴァンゲンハイムに自らの構想を説き付けた。それをまとめた「3月メモ」では、ロシアにおける政治的大衆ストライキを準備するために、あらゆる社会主義グループの結集が呼びかけられている。だが実際にはパルヴスは、この計画実現の担い手として、ボリシェヴィキが最も有力だと踏んでいた。それを示すものに、「3月メモ」ののちに加えられた補遺がある。その補遺には11項目の行動プログラムが含まれている。「1. 手持ちのあらゆる手段でツァーリ政府と闘っている社会民主党多数派に対する財政援助。その指導者はスイスにいる。2. ブカレストおよびヤッシー経由で、オデッサおよびニコラエフの革命組織との直接連絡施設の設置。… 8. ロシアの革命家たちの会議の組織。…」⁵⁶⁾

つまりボリシェヴィキへの支援が第1項で、社会主義者の会議は第8項に降格されている。15年3月11日、ドイツ大蔵省は、パルヴスが外務次官ツィンマーマン(Arthur Zimmermann)を通じて要求した、ロシア革命支援のための資金200万マルクの支出を承認した⁵⁷⁾。これをボリシェヴィキにすぎ込むことが彼の使命となったのである。

パルヴスは1915年5月半ば、チューリヒに到着する。そしてレーニンとの再会を果たしたのは、5月末のことであった。これについて、レーニンの言及はないが、パルヴスは回想を遺している。「私

はスイスで1915年の夏、レーニンに会った。私は、彼に戦争が社会革命に及ぼしている結果についての私の考えを説明し、同時に次の点に彼の注意を向けた。すなわち、戦争がつづく限りドイツに革命は起らないであろう、そして、現時点において革命はロシアにおいてのみ可能である。そして、ロシアではドイツの勝利の結果、革命が起るであろうということだった。しかし、彼は社会民主党の雑誌の発行を夢見ており、それによってヨーロッパのプロレタリアートを即座に戦場から革命へ駆りたてることができると信じていた。」⁵⁸⁾

この直談の存在を示す客観的な証言としては、ただ一つ、エストニア人の社会主義者ジーフェルト (Arthur Siefeldt) のものがある。それによれば、パルヴスはベルンの亡命ロシア人のたまり場となっていたレストランで、食事のレーニンのテーブルに案内され、来意を伝えた。するとレーニンは話し合いに同意し、すぐさまディステルヴェークのレーニンのアパートへパルヴスを連れて行った。ちょうどそこで食事を取っていたジーフェルトは、好奇心を抱いて食事のあとレーニン宅に赴くのである。しかしそのときにはもはやパルヴスの姿はなかった。レーニンは、パルヴスの提案の説明が終わらないうちに、彼を追っ払ってしまったとジーフェルトに告げた⁵⁹⁾。

交渉決裂である。レーニンは、パルヴスを介してのドイツの援助を拒否した。それを裏付ける証拠として、まずパルヴスが、ドイツの資金入金のためにスイスに開いていた銀行口座を挙げることができる。その口座からパルヴスは、15年5月に当地にやって来てから2月革命まで期間に、総計で25600スイス・フランを引き出したにすぎない⁶⁰⁾。それに呼応するかのように、スイスでのレーニンは、貧困を訴え続けている。「金がない、金がないのです!!こまったことはおもにこれです!」(1915年9月8日から13日のあいだに執筆)⁶¹⁾「私個人について言えば、手間賃が必要だ。でないと、まったく死んでしまう、ほんとに。」(1916年9月末から10月はじめまでに執筆)⁶²⁾

なぜレーニンはパルヴスの申し出を峻拒したのか。レーニンはこの会見のことを決して公にしないので、想像の域を出ないが、レーニンは、パルヴスの構想は社会主義者としての志操にもとるのみならず、彼の計画どおりに事が運べば、革命の主導権がパルヴスに握られてしまうと判断したのではないか⁶³⁾。レーニンは前世紀末よりパルヴスの理論家としての資質を認めており、また第一次ロシア革命での彼の革命家としての活躍も、熟知していたはずである。

いずれにせよ、レーニンとの折衝が失敗したことにより、ボリシェヴィキを通じて「3月メモ」の実現を狙ったパルヴスの企図は、挫かれてしまった。しかしパルヴスはひるまなかった。彼は独自の組織を設立して、ロシアに連絡するルートを切り開くのである。6月初旬、パルヴスは「北方の地下組織」の利用を志し、コペンハーゲンに向かう。スカンジナビアは19世紀後半より、西欧に亡命したロシア人革命家とロシア本国を結ぶ貴重なルートをなしていた。彼らによって書かれた非合法文庫は、二重底のトランクや女性の下着の下に隠されて、この極地地方の国境を越えたのである。パルヴスがやって来た頃も、この地ではロシア出身の亡命者が盛んに往来していた。パルヴスは彼らを自らの計画の引き込もうとする。

コペンハーゲンでパルヴスが行ったことは、主に三つあった。「科学と統計の研究のための研究

所」の設立、ロシアとの「貿易輸出会社」の設立、雑誌『グロッケ』の創刊である。特に前二者は、スカンジナビア在住のロシア人、ポーランド人を取り込むための機関であった。レーニンの信頼が厚く、スイスを経由して15年夏にスカンジナビア入りしたポリシェヴィキのフルステンベルク（Jacob Fürstenberg：筆名ハネツキーあるいはクーバ）、『ナーシェ・スローヴォ』グループのウリツキー（Moisei Uritsky）、ポーランド社会民主党のコズロフスキー（M. Yu. Kozlovsky）らがパルヴスに協力した。

とりわけ商事会社は大成功を収めた。というのも、独露間の貿易は交戦中にもかかわらず、盛んに行われていたからである（統制が厳しくなるのは1916年以降）。コペンハーゲンはその中継地となっていた。それゆえパルヴスは容易に商売と革命活動を結び付けることができた。彼の部下が商人として合法的にロシアに行くことができたのである。しかし肝心の、彼らがロシア本国のどの革命組織に接近し、支援したかは、明らかになっていない。各地のスト委員会、労働組合内の独立した革命細胞、メジライオンツィなどかと推測される⁶⁴⁾。だが、後述するように、16年1月には、パルヴスがほぼ予想した数の人々が、ペトログラードの街頭に繰り出すのである。

コペンハーゲンの革命司令部を指導する一方で、パルヴスは当地のドイツの在外公館にも協力を求めた。7月末、彼は公使ブロックドルフ＝ランツァウ（Ulrich Graf von Brockdorff-Rantzau）に初めて面会し、以後8月中旬まで幾度か内談を重ねている。ここでパルヴスは、ドイツ帝国政府指導部が模索していたロシアとの単独講和工作を批判し、自ら進めている革命促進政策によればロシアに対して勝利を収めることができる旨力説した。彼はランツァウを通じて、外務省にロシア革命が切迫していることを知らせたのである⁶⁵⁾。実際、宰相ベートマン＝ホルヴェークは、デンマークの国家顧問官アネルセン（Hans-Niels Andersen）を介して、数度ロシア皇帝に講和の意を伝えていた。しかし8月3日、ロシア皇帝より三度目の拒否の返事が来て、ホルヴェークは方針を変え、ロシアの早期崩壊に対する期待が復活する⁶⁶⁾。パルヴスの批判は時機を得ていた。

ランツァウは本国に、パルヴスの提案を報告し、彼の能力を絶賛した。8月10日、彼は外務省にこう打電している。「私はヘルファントを、ロシアおよびバルカン全体に関する非常に経験豊富で、すぐれた権威者であるばかりでなく、自信あふれる大胆な政治家であるともみなしている。我々は彼を、今そうしているように、味方につけているかぎりは、彼の助言を留保なしで利用することができる。」⁶⁷⁾ この進言により、パルヴスは8月13日、再びベルリンを訪問する。

iii) 国際的プレスキャンペーン

外務省で次官ツィンマーマンと討議した際、パルヴスは、雑誌『グロッケ（鐘）』（*Die Glocke*）の発刊というコペンハーゲンにおける三つ目の仕事について語った。これは、二つのマイノリティーの遠心力によるツァーリ帝国の解体という彼の構想を補完するものと言ってよい。その果すべき役割は、反ツァーリズムの国際世論の喚起であった。そして彼の原稿は、軍の検閲を避けるため、外務省の許可を得て外交官の往来を利用してドイツ国内に送られたのである⁶⁸⁾。

ゲルツェンの『コロコル（鐘）』（*Колокол*）にちなんで命名された『グロツケ』の発刊計画は、すでに1915年5月に始動していた。パルヴスは部数5000部の週刊誌の経費見積りを、ミュンヘンの印刷所にさせている。7月にはそのための出版社「社会科学出版所」を同地に設立。とりあえず彼は、雑誌創刊の資金として2万マルクを用立てた。しかし7月1日、次いで8月15日という創刊予定は、コペンハーゲンおよびベルリンからの遠隔操作では守ることはできず、ようやく創刊号発行にこぎつけたのは、9月1日のことであった⁶⁹⁾。副題は「隔週刊社会主義雑誌」（“*Sozialistische Halbmonatsschrift*”）であり、毎月1日と15日に出された。1916年4月1日以降は週刊になる（廃刊は1925年9月26日）。彼は年間14万マルクの補助金を拠出していた⁷⁰⁾。

パルヴスは、『グロツケ』創刊号の序文で、発刊の目的を提起している。「社会主義は労働者階級を拠りどころとしている。労働者階級の関心は、だが、全世界を包含している。プロレタリアートは文明の担い手たりうるし、またそうあるべきである。」こうプロレタリア大衆の知的関心を喚起したあと、時代認識が示される。「我々はすべてを改造する時代に生きているゆえに、我々には特定の専門分野はない。第一に我々は当然、世界大戦が招いている経済的、文化的改造に注意を向けるだろう。」しかるに今波及している社会主義的認識は、人気取りに窮々として、その矛先を鈍らせている。それゆえ、「我々は、それが誰の役に立つか、あるいは、誰に損害を与えるかに頓着なく、率直に、自由に、あらゆるあからさまの真実を述べることだろう。』⁷¹⁾ 彼はタブーなき雑誌の編集を目指し、「読者に取り入る」ことを拒否した。そこには、それまで党の論壇からその急進性ゆえに、意見発表を封殺されてきた彼の憤りが窺える。

創刊号には序文に続いて、50頁近い長文の「ドイツ社会民主主義」なるパルヴスの論文が掲載された。この力作において、彼は19世紀にさかのぼり、ドイツ社会民主主義の歴史を回顧することによって、SPDの現状を捉え直す。次にその論旨を掲げよう。

1890年9月の社会主義者鎮圧法の失効(公布は1878年10月)は、ドイツ社会民主主義の勝利として位置付けられる。そのとき同党は、ドイツ・ブルジョアジーが比較的脆弱だったことも手伝って、すでに強力な議会政党に成長を遂げていた。そして、1889年にパリで開かれた第二インターナショナル結成大会において、ドイツ社会民主主義は、世界のプロレタリアートの先駆者、第二インター最強の砦として称賛され、各国の党の模範となったのである⁷²⁾。

それから25年が過ぎ、党勢は大いに伸長した。しかし、「戦術の明白さと決断を失ってきている」のが現状である。肝心の革命を決断できずにいるのだ。すなわち、「革命と現実との間には、渡ることのできない隔たりがあった。この矛盾に気付かれないために、…“理論的教化”が不可欠だった。」エルフルト綱領（1891年採択）はその結晶と言いうる。それは、「社会革命の経済的問題、資本主義的生産-分配制度を社会主義的な制度にいかにして変えるべきかという問題を、…無視していた。」「社会革命から社会的内容が取り去られてしまった。」実体を欠いた綱領を、党の成長が糊塗した。そして、「過去の鏡に映して自らを称えることがなされた。空想の上での未来と栄光に満ちた過去との間で、現在が忘れ去られた。』⁷³⁾

その間、ドイツ社会民主主義は革命思想を弄ぶのになれ、平和症候群に浸っていた。事態はドイツ社会民主主義の頭越しに展開していたのである。なるほどインターの反戦決議はなされた。だがこの決議は、実は各国の党が、防衛戦争を当然視する本国の雰囲気の中では提唱できないものを、国際的結合を通して行った表明なのだ。つまりそれは、反戦闘争における社会主義の無力を示したものにすぎない。かくて、戦争勃発、ロシア軍の脅威という現実を突き付けられたのである。SPDは祖国擁護を選択した。「それはやむを得なかった。…ドイツ社会民主主義には大きな政治的責任がある。しかしこのことは、機会や票決の責任ではない。それは、25年間用いられ、決定的瞬間にもはや変更できなかった誤った戦術だった——数十年来積みもった責任なのである。』⁷⁴⁾

ではドイツ社会民主主義は、続いて何をなすべきなのか。「戦争とそれによって創出される政治状況は、プロレタリアートの政治的立場を強めるために、利用されねばならない。」前線では、労働者出身の兵士たちが「勇敢さ、主体性、果断さ」を学んでいる。戦争は、革命戦士にふさわしい、新たな人間類型を創出しているのだ。彼らが復員すれば、不毛な党内論争は退場することであろう。従って、彼らの運命と文化発展にとって根本的意味をもつ要求を掲げるべきなのだ。すなわち、「1. 産業における8時間労働日 2. 国民学校の、真の国民教育機関への改組」である。ドイツ社会民主主義は、この方針に従えば、再び他国に範を示すことができよう⁷⁵⁾。

要約すれば、パルヴスは、強力になればなるほど革命性を喪失していく社会主義政党のジレンマを指摘し、これを批判した。この点では以前と変わっていない。「8月4日」もその保守化の必然的帰結として把握されている。だが彼は平和主義者ではなかった。むしろ戦争に、SPDの優柔不断を一掃する起爆剤としての積極的な意義を見いだしている。それが宿敵ツァーリズムとの戦いならばなおさらであった。大戦は、彼が待ち望んだ戦争と言われる所以である。

第一章で触れたように、続く2号、3号で、パルヴスは戦争に対する態度を明らかにする。ドイツ軍の勝利によるロシア・プロレタリアートの解放を唱える『グロツケ』の下には、レンシュ、ダヴィド、クノーら、かつては党内最左翼に属した「社会排外主義」的黨員が集まって来た。10月1日の第3号から編集をヘーニッシュに委ねて以降、「社会排外主義」的傾向は強まり、『グロツケ』は『社会主義月刊』(Sozialistische Monatshefte)と並ぶ、SPD右派の雑誌となってゆく。しかしこの傾向は、必ずしもパルヴスの意図とは一致していなかった。というのも、この戦争において、パルヴスはツァーリズム打倒を最大の目標としたのに対して、レンシュらはイギリスの世界支配からの解放を唱えていたからである。パルヴスは『グロツケ』を、「レンシュ・クノー・ヘーニッシュグループ」に利用される格好になってしまった⁷⁶⁾。それでも彼は、自らの雑誌を持っていることで満足していたのである。当然レーニンはこの雑誌をこき下ろした。「ロシア革命の利益のために、という粗雑に塗りたくった看板でおおいにかくされている、ドイツ排外主義のまったくの掃だめである」と⁷⁷⁾。

3. 「1916年1月9日」を目指して

『グロッケ』の発刊準備に忙殺された時期にも、パルヴスはロシア情勢についての情報収集を怠らなかった。9月7日、彼はランツァウに、ロシアおよびその軍隊内での騒乱は「破局に至るに相違ないほど」進んでいると確言した。ドイツがロシア戦線を維持するなら、早晚革命が起こる。しかしドイツ軍はペトログラードの占領を企図してはならない。それは大衆の気分を反動的に変え、革命を遅らせてしまうからだ。ロシアを「安楽死」させるためには、南ロシア、ドネツ盆地の占領で十分である、と⁷⁸⁾。パルヴスは、「3月メモ」でもこの黒海沿岸地方を有望視しており、ここは海戦で混乱しているゆえ、扇動に服しやすいと述べている。また先に示したように「3月メモ」補遺では、そこでの工作が第二項目に掲げられていた。

その後しばらく、パルヴスはロシアでの地下活動の進捗状況については沈黙を保っていた。ようやく11月21日、彼は再びドイツ公使館に現れ、最近ロシアから戻った彼のエージェントから得た新情報を伝えた。それによれば、軍の士気弛緩は、8月23日(露暦)のツァーリ自身による最高司令官就任以降も変わっていない。また9月3日(同)のドゥーマ休会後の事態の推移は蜂起にとって好都合である。革命組織は24時間以内にペトログラードで10万人規模のストライキを打つことができる。そしてパルヴスは、「血の日曜日」の記念日に当たる1916年1月9日(西暦1月22日)に、ストライキが起こると断言した⁷⁹⁾。これがロシア革命の起点になるはずであった。

11月30日、パルヴスは再びランツァウに会い、「ロシア革命化の可能性について」という7頁ほどのメモ(以下、「11月メモ」)を提示した。ここでパルヴスは、再度ツァーリ政府と単独講和を結ばないようドイツ政府に警告している。ロシアの現体制は「民族主義的傾向」が強く、たとえ講和を結んでも連合国を後ろ盾にその破棄をもくろむに相違ない。だが革命政府となれば、即時の講和が焦眉の課題となり、ドイツに相当の譲歩をするのであろう、と。ではロシアの事態はどうなっているのか。パルヴスの認識するところ、革命組織は1905年のゼネスト前より強力であり、大衆の憤激もそのとき以上になっている。軍には反政府的空気が蔓延している。無気力と無関心が唯一の心配であるが、情勢は十分高揚していると彼は見ていた。そして、革命促進のための三つの計画を提案したのである。

第一に、ドイツ軍によるリガ、デュナブルク(現地名グウガフピルス)の占領。東部戦線においてはこれで、ロシア勝利の望みは断ち切られる。第二に、ロシアの金融市場への攻撃。具体的手法として、ロシアに偽造通貨を流通させルーブリの価値下落を図り、恐慌を惹き起こす。第三に、軍隊に対する宣伝活動。「革命的気分を刺激する」ことを主眼に SPD とドイツの労働組合が指揮を取る⁸⁰⁾。

ランツァウはこのメモを、11月30日付の宰相ベートマン＝ホルヴェークあての親書に同封し、「実際のであり、おそらく問題の解決をもたらす見込みを持っているだろう」と書き添えた。外務省は

パルヴスを三たびベルリンに招くことを即決した。パルヴスは12月16日から20日にかけて、外務省および大蔵省で上記の三項目の計画を論議したのである。この計画に対して、外務省は同意したが、大蔵省は難色を示した。しかし蔵相ヘルフェリッヒ (Karl Helfferich) は、第三項目のために100万ルーブリの拠出を約束した⁸¹⁾。

ベルリンからコペンハーゲンに戻ったパルヴスは、早速翌日、その模様をランツァウに報告した。さらに彼は目前に革命予定日を控え、「ロシア革命を完全に組織させるためにはおよそ2000万ルーブリが必要となる」と語った。しかし一挙に配ることは危険なので、とりあえず100万ルーブリを自分のエージェントに渡す旨、外務省に要求する。パルヴスはこのとき「革命は1月9日(22日)頃惹き起こされ、たとえそれがすぐに全国を掌握せずとも、きっと安定した状態に逆戻りはしないだろう」と、はじめて革命成就に留保を付けている。全国規模では組織化が間に合わないというのである⁸²⁾。その理由として彼は、第一次ロシア革命との相違を挙げている。

「1905年にブルジョア諸党は革命を支持し、ストに参加した労働者にすすんで賃金を支払った。しかしながら今では、ブルジョアジーは運動に対して好意的ではない。それゆえ革命委員会は全費用を持たねばならないのだ。」⁸³⁾

蔵相ヘルフェリッヒはこの額を聞き、「途方もない空想」だと外務次官ツィンマーマンに伝えた。しかし「外務省がこの支出を有益かつ正当なものとみなすなら、私は反対致しません」と付け加えている。この手紙の発信日と同じ12月26日、外務省は100万ルーブリの支払いを認めていたのである⁸⁴⁾。12月29日、パルヴスはそれを受け取った。そして1916年1月初め、彼はこの資金を携えて、より情報の得やすいストックホルムへと向かう。1月3日には、ランツァウに「すべて順調」と打電している⁸⁵⁾。

1月22日、ヴィボルク地区が口火となって、ペトログラードの55工場の労働者約67000人がストに突入する。前年秋から後退していた首都の労働者の闘争は、これをきっかけに3月まで盛り上がりを見せることになる。2月にはストの波は、プチャーロフ工場にまで及んだ⁸⁶⁾。また、首都に先立って1月11日には、黒海沿岸の軍港ニコラエフの海軍工廠の労働者1万人以上がストに立ち上がった。このストはなかなか収まらず、2月23日に海軍本部が工場閉鎖を命令するまで続いた⁸⁷⁾。以上がパルヴスの暗躍とどの程度関連があるかは定かでないが、少なくともこれらの地は、彼が「3月メモ」、「11月メモ」で注目していたところである。彼の「1月9日」への着眼は根拠のないものではなかったと言えよう。しかも首都の労働者は、「戦争をやめろ」などという政治的スローガンを掲げ、ニコラエフでもほぼ同様に高度の政治的要求が出されていた。「1月9日」の首都のデモ参加者は、パルヴスの見積りと同じ10万人という説もある⁸⁸⁾。とにかく、ほぼ彼の構想どおりにストは発生したのであった。

しかしながら事実として、これらのストは、革命へと転化しなかった。パルヴスは1月22日、コペンハーゲンに戻りランツァウに苦しい言い訳をしている。翌日、ランツァウは宰相にそれを報告した。

「彼〔パルヴス〕の自由に委ねられた総額100万ルーブルは直ちに送られ、すでにペトログラードに届き、所期の目的のために使われた。ヘルファントは1月22日に行動を起こすよう主張した。しかしながら、彼の信頼するエージェントは、即座の行動は時期尚早だと述べて、断固としてこれに反対だと彼に忠告し、現状を次のように説明した。革命的行動に出ようという諸組織の決意は、依然堅固なものであり、変わっていない。しかしこの二か月の間、政治状況は即座にストを構えることは得策ではないと思われるほど変化した。」⁸⁹⁾

政府、ブルジョア諸党による反革命的気分、策動の高まり、ペトログラードの食糧不足を救うために政府が取った特別措置、さらに、街頭の大衆を統制できないのではないかと、運動はアナキーになり、それゆえ政府に簡単に打倒されてしまうのではないかと、という革命指導者の懸念が「不得策」の理由に挙げられた⁹⁰⁾。明らかにパルヴスは、責任をエージェントに転嫁して、自分のメンツを守ろうとしている。しかしこれはドイツ政府には弁解にしか聞こえず、外相ヤーゴは、パルヴスがドイツの資金を着服したのではないかと疑った。結局彼は2月革命まで、ドイツの対露謀略からは外されてしまう。

とまれ、この失敗において留意しなければならないのは、パルヴスがエージェントの楽観的な報告に振り回されて、自分を見失ってしまったことである。それは「3月メモ」が「ロシアにおける大衆ストライキの準備」だったのに対し、「11月メモ」が「ロシアの革命化の可能性」と題されたことに象徴されている。パルヴスの革命観に従えば、革命は“作る”ことはできないはずであった。それゆえ「3月メモ」では、「大衆スト」にのみ言及したのである。彼はプロレタリア大衆の革命的イニシアチブに強い信頼を寄せていただけに、それに点火する刺激さえあればよしとしていた。その刺激が、大衆ストであった。ところが「11月メモ」では、一挙に「革命化」を論じている。この立場は、以前彼が「革命製造主義者」(Revolutionsmacherei)と批判したものではないのか⁹¹⁾。そこには、ヨーロッパの反動ツァーリズムを倒す絶好機を迎えたパルヴスの焦りが感じられるのである。

むすびにかえて

最後に問われるべきは、社会主義者としての節度の問題である。大戦勃発以降、パルヴスが取った行動は、どうひいき目に見ても、既存体制に巻き込まれ過ぎていた。自国支配層と結託して他国の革命を促進するという発想は、ともすれば侵略者の論理になりかねない。そこには自国のプロレタリアートに対する視点が欠落している。ドイツ帝国主義の勝利は彼らに革命をもたらすはしない。ツァーリズム崩壊はドイツの反動を弱め、社会主義革命に道を開くという彼の論法には、やはり飛躍がある。しかもそのために彼が用いた方法は、明らかに社会主義者の取るべき手段の範疇から逸脱していた。

なるほどレーニンも、特に2月革命以降、ドイツ政府から資金援助を受けていた。またトロツキーが携わっていた新聞『ナーシェ・スローヴォ』にも、パルヴスを經由してドイツの金が入っていた。しかし彼らは、自国の革命を目指して他国の支配層を利用したのである。パルヴスと彼らの間

には、越えがたい一線がある。すべてはパルヴスのツァーリズム観に起因していた。彼自身はこの一線が見えず、自分は社会主義の大義のために行動していると誤信していたのである。実際のところは、ツァーリズム打倒の執念が、社会主義者として是認されうる行動の限界を乗り越えてしまっていたのだ。

ただし視線をロシア革命の成功という一点だけに集中させると、パルヴスに対する見方も変わってくる。敢えて「歴史的もし」を用いれば、もし SPD がレーニンの言うとおり、自国のカイザー打倒のために働いたとすれば、ポリシェヴィキ革命は起こらなかったのではないか。もし「8月4日」がなければ「11月7日」もなかったのではないか。少なくともパルヴスは、この点では自らの主義にとらわれることなく、現実的な選択を行った。政府指導部に深くコミットした彼の行動からすれば、パルヴスは社会主義者としては失格でも、「傑出した現実政治家」⁹²⁾ではあったのだ。SPD 左派の信念である「革命の現実性」⁹³⁾を、彼はある意味では、極限にまで究めたとも言えよう。そこに彼の悲劇もあったのである。

かくて大戦を境に、パルヴスの思想と行動は分裂する。本稿が対象とした時期以降も、彼は急進左派として思考し、ドイツの愛国主義者として行動する。それは、ツァーリ帝国転覆を至上命題とする彼のモチーフからすれば整合的な選択でも、他者からは「新しいパルヴス」の誕生と映った。しかしこの分裂ゆえにこそ、彼はロシア革命の陰の立役者になりえたのであった。ロシア革命への彼の関りについては、今後の事としたい。

注 1) レーニンは「社会排外主義」を次のように定義している。「われわれの理解する社会排外主義とは、現在の帝国主義戦争で祖国擁護の思想をみとめ、この戦争で社会主義者が「自」国のブルジョアジーおよび政府と同盟することを正当化し、「自国」のブルジョアジーにたいするプロレタリア的＝革命的行動を宣伝し支持するのを拒絶する、等々することである。」「第二インタナショナルの崩壊」『レーニン全集』（大月書店）第21巻、241-242頁。

2) パルヴスの伝記として、シャルラウ、ゼーマン、蔵田、門倉訳『革命の商人』（風媒社、1971年）。事実関係について、本稿は主に同書138-205頁に拠っている。邦語の研究書には、山口和男『ドイツ社会思想史研究』（ミネルヴァ書房、1974年）、田中良明『パルヴスと先進国革命』（梓出版社、1989年）がある。また、パルヴスの息子エヴゲーニー・グネージンЕвгений Гнединの回想録『迷宮からの脱出』*Выход из Лабиринта*（New York, 1982）が知られている。

3) Joel Carmichael, "Lenin+?=Trotsky-Behind the Bolshevik Putsch", *Midstream*, Dec. 1975, p.20.

4) ドイツチャー、田中西二郎他訳『武装せる予言者・トロツキー』（新潮社、1964年）241頁。

5) David S. Anin, "Lenin, Trotsky and Parvus", *Survey*, 24-1, 1979, p.204.

6) 西川正雄『第一次世界大戦と社会主義者たち』（岩波書店、1989年）86頁。なおバーゼル大会の決議文は、レーニン、宇高基輔訳『帝国主義』（岩波文庫、1956年）209-216頁に付録として訳出されている。

7) E. H. カー、宇高基輔訳『ポリシェヴィキ革命』第三巻（みすず書房、1971年）409、418頁。

8) Parvus, "Für die Demokratie - gegen den Zarismus", *Die Glocke*, Jg.1, Nr.2, 15.9.1915, S.77. この論文はもともと SPD 系の新聞向けに書かれたものであるが、戦争のためドイツに送り届けることができず、当初はルーマニア及びブルガリアの社会民主主義系機関紙に翻訳・掲載された。1914年12月には「ウクライナ解放同盟」が小冊子として翻訳・出版し、パルヴスはウクライナ語版のための序文を書いた。この序文はのちに『グロッケ』第1巻第3号（1915年10月1日）148-155頁に掲載された。

9) Parvus, "Offener Brief an die Zeitung 'Nasche Slowo' in Paris", *Die Glocke*, Jg.1, Nr.3, 1.10.1915, S.

156. なおこの論文は1915年4月にはすでに脱稿していた。Ebenda, S.155.
- 10) Parvus, “Die deutsche Sozialdemokratie”, *Die Glocke*, Jg.1, Nr.1, 1.9.1915, S.48.
 - 11) Parvus, “Für die Demokratie - gegen den Zarismus”, S.83-84.
 - 12) Parvus, “Der Freiheit eine Gasse”, *Die Glocke*, Jg.1, Nr.3, S.118, 120.
 - 13) Parvus, “Meine Stellungnahme zum Krieg I. Vorrede zu der ukrainischen Ausgabe der Schrift: Für die Demokratie - gegen den Zarismus”, *Die Glocke*, Jg.1, Nr.3, S.151.
 - 14) Parvus, *Im Kampf um die Wahrheit* (Berlin, 1918), S.12.
 - 15) Konrad Haenisch, *Parvus Ein Blatt der Erinnerung* (Berlin, 1925), S.31.
 - 16) Parvus, “Für die Demokratie - gegen den Zarismus”, S.85.
 - 17) Parvus, “Die deutsche Sozialdemokratie”, S.5.
 - 18) 彼らについてレーニンは、こう述べている。「ロシアの社会排外主義者(ブレハーノフをかしらとする)は、1870年の戦争のさいのマルクスの戦術を引合いにだし、ドイツの社会排外主義者(レンシュ、ダヴィッド一派の型の)は、ロシアとフランスとを同時に相手にして戦争するときにはドイツの社会主義者は祖国を擁護する義務があるという、1891年にエンゲルスがおこなった言明…を引合いにだし、最後に、国際的な排外主義を和解させ正当化しようとのぞんでいるカウツキー型の社会排外主義者は、マルクスとエンゲルスが戦争を非難しながらも、それでもやはり戦争がおこったさいには、1854-1855年から1870-71年までと、さらに1876-77年には、交戦国のいずれかに味方したことを、引合いにだしている。」『社会主義と戦争』同『全集』第21巻、314-315頁。
 - 19) レーニン、前掲「第二インタナショナルの崩壊」215-217頁。
 - 20) レーニン「社会主義インタナショナルの現状と任務」同『全集』第21巻、25頁。
 - 21) レーニン「よその旗をかかげて」同『全集』第21巻、142頁。
 - 22) レーニン、前掲「社会主義と戦争」315頁。
 - 23) レーニン、前掲「よその旗をかかげて」136-137頁。
 - 24) レーニン「帝国主義戦争における自国政府の敗北について」同『全集』第21巻、278頁。
 - 25) レーニン「ロシア社会民主労働党在外支部会議」同『全集』第21巻、157頁。
 - 26) 和田春樹『ニコライ・ラッセル』上(中央公論社、1973年)218頁。
 - 27) レーニン、前掲「帝国主義戦争における自国政府の敗北について」279頁。
 - 28) レーニン「ヨーロッパ戦争と国際社会主義派」同『全集』第21巻、8、10頁。
 - 29) レーニン「戦争とロシア社会民主党」同『全集』第21巻、19頁。
 - 30) レーニン「ロシアの敗北と革命的危機」同『全集』第21巻、392-393頁。
 - 31) レーニンは、1914年10月17日付けのシリャブニコフ宛の手紙の中で、「ツァーリズムはカイザー支配より百倍も悪い」ゆえに、ロシア人にとってツァーリズムの敗北は最小の悪であると述べているが、そこからドイツの勝利に触れるほど踏み込んではいない。レーニン「ア・シリャブニコフへ 1914年10月17日」同『全集』第35巻、164頁。
 - 32) 藤田省三『現代史断章』(未来社、1974年)20頁。
 - 33) ボルケナウ、佐野、鈴木訳『世界共産党史』(合同出版、1968年)35頁。
 - 34) マルトフ、トロツキーらが中心となってパリで発行されていた『ナーシェ・スローヴォ』紙が、パルヴスはロシアの社会主義者なのか、ドイツの社会主義者なのかと質したのに応えて、パルヴスはこう述べている。「私は自分をドイツの社会民主主義者とみなしていると応えよう。…私は1887年以来、ドイツ社会民主主義の精神生活に加わり、私はその間、ドイツ社会民主主義とともにプロレタリアの階級闘争のあらゆる変遷、動揺、努力を体験して来た…私は自分がドイツ文化の信奉者であると宣言する用意がある。」Parvus, “Offener Brief an die Zeitung ‘Nasche Slowo’ in Paris”, S.159-160.
 - 35) カー、前掲書、418頁。
 - 36) フィッシャー、村瀬興雄監訳『世界強国への道』I(岩波書店、1972年)153-154頁。
 - 37) Michael Futrell, *Northern Underground* (London, 1963), pp.120-121. なお、ケスキュラについては、*ibid.*, pp.119-151.
 - 38) Z.A.B.Zeman (ed.), *Germany and the Revolution in Russia 1915-1918* (London, 1958), pp.1-2.
 - 39) このメモは、Zeman, *op cit.*, pp.140-152 と Scharlau und Zeman, *Freibeuter der Revolution* (Köln, 1964), S.361-374 に転載されている。本稿での引用は英語版による。
 - 40) Zeman, *op.cit.*, pp.140-141.

- 41) *ibid.*, pp.141-142, 145-149.
- 42) *ibid.*, p.145.
- 43) *ibid.*, pp.143-144.
- 44) *ibid.*, p.144.
- 45) *ibid.*, p.150.
- 46) W. B. Scharlau, *Parvus-Helphand and the First World War*, D. Phil. (unpublished), Oxford, St. Antony's College, 1963, pp.85-86. フィッシャーはパルヴスの構想の二つの弱点として、革命がすぐにも起こると考えた点とメンシェヴィキを味方に引き入れることができるという幻想を抱いた点を挙げている。フィッシャー、前掲書、175頁。
- 47) Scharlau, *op. cit.*, p.iv (ABSTRACT), pp.75-82.
- 48) フィッシャー、前掲書、161-162頁。
- 49) シャルラウ、ゼーマン、前掲書、145-146頁。Helga Grebing, "Österreich-Ungarn und die 'Ukrainische Aktion' 1914-1918", *Jahrbücher für Geschichte Osteuropas*, Bd.7, H.3, 1959, S.276-277, 279.
- 50) Parvus, "Ein Verleumdungswerk", *Die Glocke*, Jg.1, Nr.3, S.127.
- 51) Парвус, *На оборону демократії - проти царизму!* (Константинополь, 1914). この小冊子の構成は、「ウクライナ解放同盟」の序文3-6頁、パルヴスのウクライナ語版への序文（「解放同盟」による翻訳）7-18頁、「民主主義のために一ツァーリズムに反対して」本文19-32頁。なおパルヴスの序文と本文のドイツ語版については、本稿の注8を参照のこと。本稿での引用はドイツ語版による。
- 52) Parvus, "Meine Stellungnahme zur Krieg I. Vorrede zu der ukrainischen Ausgabe der Schrift: Für die Demokratie - gegen den Zarismus", S.148-150.
- 53) Ebenda, S.153-155.
- 54) Grebing, a.a.O., S.278, 281.
- 55) Parvus, "Das neue Rußland", *Die Glocke*, Jg.1, Nr.4, 15.10.1915, S.177.
- 56) Zeman, *op. cit.*, pp.150-151.
- 57) *ibid.*, p.3.
- 58) Parvus, *Im Kampf um die Wahrheit*, S.50. なお訳文は、シャルラウ、ゼーマン、前掲書、170頁に拠った。
- 59) Futrell, *op. cit.*, p.173.
- 60) Alfred Erich Senn, "The Myth of German Money during the First World War", *Soviet Studies*, vol. XXVIII, no.1 (1976), p.86.
- 61) レーニン「ア・エム・コロントイヘ」同『全集』第36巻、394頁。
- 62) レーニン「ア・シリャプニコフヘ」同『全集』第35巻、246頁。
- 63) シャルラウ、ゼーマン、前掲書、171頁。
- 64) Scharlau, *op. cit.*, pp.168-169. 例えばメジオリオンツィ（ペトログラードの社会主義者グループ）には、ウリツキーが所属していた。彼を通じてか。ドイッチャー、前掲書、277頁。
- 65) Scharlau, *op. cit.*, pp.134-135.
- 66) フィッシャー、前掲書、233-235頁。
- 67) Scharlau, *op. cit.*, p.129.
- 68) Zeman, *op. cit.*, p.4.
- 69) Robert Sigel, *Die Lensch-Cunou-Haenisch-Gruppe* (Berlin(W), 1976), S.60.
- 70) Heinrich Ströbel, "Helphand-Parvus", *Die Weltbühne*, 15.Jg., Dec.1919, S.716.
- 71) Parvus, "Zur Einführung", *Die Glocke*, Jg.1, Nr.1, 1.9.1915, S.1-2.
- 72) Parvus, "Die deutsche Sozialdemokratie", *Die Glocke*, Nr.1, S.12-19.
- 73) Ebenda, S.24, 31-34.
- 74) Ebenda, S.36-37, 40-41.
- 75) Ebenda, S.48-52.
- 76) Sigel, a.a.O., S.61-62.
- 77) レーニン「最後の一線にて」同『全集』第21巻、436頁。
- 78) Scharlau, *op. cit.*, pp.163-164.

- 79) シャルラウ、ゼーマン、前掲書、193頁。George Katkov, *Russia 1917* (London, 1967), p.87.
- 80) 同書、195-197頁。
- 81) 同書、197-198頁。Scharlau, *op. cit.*, p.175.
- 82)83) Zeman, *op. cit.* p.9.
- 84) *ibid.*, p.10.
- 85) Scharlau, *op. cit.*, pp.182-183.
- 86) 江口朴郎編『ロシア革命の研究』（中央公論社、1968年）343-344頁。
- 87) シャルラウ、ゼーマン、前掲書、201頁。
- 88) Katkov, *op. cit.*, p.89.
- 89) Zeman, *op. cit.*, p.14.
- 90) *ibid.*, p.15.
- 91) 拙稿「パルヴスの社会主義像」『明治大学大学院紀要』第25集-3（1987年）128-129頁。
- 92) Stephan Possony, *Jahrhundert des Aufbruchs* (München, 1956), S.57.
- 93) Heinz Schurer, "The Russian Revolution of 1905 and the Origin of German Communism", *The Slavonic and East European Review*, vol.39, 1961, p.461.